

煩惱

サンスクリット語 kleśa の訳。惑・結・使・結使・纏・縛・染・塵勞などとも言う。心身をかき乱し、悩まし、けがす精神作用の総称で、最初期の仏教にはまれにしか現れない語であるが、やがて頻繁に用いられるようになり、詳細な分析や分類がなされるに至った。類語に随眠・漏・暴流・蓋などがある。

煩惱の分類には、根本煩惱と枝末煩惱＝前者は根底的・本質的な煩惱、後者は前者に付随して起こる煩惱のこと。根本煩惱は本惑などともいい、基本的には貪（むさぼり）・瞋（怒り）・癡（無知）・慢（高慢）・疑（疑念）・見（悪見）・の六煩惱（六随眠）、あるいは有身見（自我を立てる見解）などの五見を加えた十煩惱（十随眠・十使）、が数えられる。このうち貪・瞋・癡の三つは根本なので、三毒・三垢などという。また枝末煩惱は、随惑・随煩惱などとも称し、俱舍宗では放逸（勝手）・懈怠（怠慢）・不信・睡眠・悪作（後悔）などの一九を数える。

見惑と修惑＝前者は見道（四諦などの仏教の真理を明らかに見る位）において離れられるもの、後者は修道（真理を習得していく位）において離れられるものをいう。俱舍宗では、四諦との関係から見惑に総じて八十八使を数え、修惑として十使をあげ、合わせて九十八使（九十八随眠）という。

十纏＝無漸（内に恥じないこと）・無愧（人に恥じないこと）・嫉・慳・悪作・睡眠・掉挙（心の高ぶり）・

昏沈（心が暗く沈むこと）・忿・覆（罪を覆い隠すこと）の十。

百八煩惱＝九十八随眠に十纏を加えたもの。「八万四千の煩惱」などと同じように数多くの煩惱の総数表す語としても用い、一説には除夜の鐘を一〇八つくのはこれらの煩惱を消すためだと言う。

<十煩惱>

- ・貪：むさぼり求めること
- ・瞋：怒りにくむこと
- ・痴：道理に暗くて適確な判断を下せず、迷い悩むこと
- ・慢：思いあがって人をみくびること
- ・疑：教えについて、あれこれと思いまどうこと

- ・有身見：「われ」とか「わがもの」とかいう思いに執着すること
- ・辺執見：極端を正しいと考えるかたよった見解
- ・邪見：道理にはずれた誤った見解
- ・見取：自己の考えを最高とし、他の考えを誤りとする見解
- ・戒禁取：誤った戒律や誓いを守ることによって解脱が得られるとする見解

<十纏>

- ・無慚：自分の犯した罪を、自分に対して恥じない心
 - ・無愧：自分の犯した罪を、他人に対して恥じない心
 - ・嫉：ねたむ心
 - ・慳：ものおしみする心
 - ・掉挙：浮ついて静まりのない心
 - ・悪作：過去の悪い行いに対して、そのあやまちを悔いること
 - ・昏沈：心が沈み、ふさぎこむこと
 - ・睡眠：意識がぼんやりして刺激反応が起こらず、眼・耳・鼻・舌・身がはたらかないこと
- ことに対して、怒りの情をもつこと
- ・覆：自己のあやまちをおおいかくすこと

参考文献

中村元『仏教語大辞典 縮刷版』東京書籍,1981年
 木村清孝ほか『仏教辞典』小学館,1988年